

鳥居龍蔵の妻

鳥居きみ子を知ろう！

鳥居きみ子（1881－1959）は、現在の徳島市に生まれました。小学校の教員を務めていましたが、修学のため上京し、東京音楽学校（現東京藝術大学）に入学します。その後、東京帝国大学で人類学を研究していた同郷の鳥居龍蔵（1870－1953）と出会い、結婚しました。

龍蔵との出会いをきっかけに、きみ子は人類学に関心をいだくようになります。特筆すべき成果は、生まれたばかりの娘を連れた家族三人でのフィールドワークを通じ、モンゴルの文化や風俗に関する貴重な記録を残したことです。また、絵本で有名な「スーホの白い馬」という話にも登場する、モンゴルの伝統楽器「馬頭琴」の名付け親ともいわれています。



20歳頃のきみ子



モンゴル調査出発前の鳥居一家 1907年

1906（明治39）年、きみ子は、モンゴルにあるカラチン王府というところの女学校教員として招かれました。夫の龍蔵も中国大陸の人類学的調査に大きな興味を持っていたため、夫妻でモンゴルへ赴くことになりました。

夫妻はまず、王府の学校で教員生活を送った後、生まれたばかりの子どもを連れてモンゴルでフィールドワークを行います。この時の調査が、後の龍蔵の博士論文執筆につながり、また、旅の記録をまとめた彼女の著作は、モンゴル研究者としてのきみ子の名が、世間に広く知られるきっかけとなったのです。

さらに、きみ子は和歌・短歌や音楽も得意で、多彩な人物でした。旅情を歌に詠んだり、モンゴルの音楽を人の前で演奏したりしました。



ゲル前の鳥居一家
1908年6月 西チャロットのゲル前



きみ子が起こしたモンゴル民謡の楽譜



鳥居きみ子『蒙古行』
読売新聞社、1906年10月 読売新聞
への連載記事をまとめて出版した旅日記。

40代中頃になったきみ子は、約20年前のモンゴル調査の成果をまとめ、『土俗学上より観たる蒙古』として出版しました。著書は世間から高い評価をもって受け入れられ、モンゴル研究者としてのきみ子の存在が世の中に広く知られるようになりました。

また、1924（大正13）年、夫の龍蔵が長年勤めた東京帝国大学を退職し、家族とともに人類学を追究していきました。

1927（昭和2）年に、長男の龍雄がパリにて病死するという不幸が訪れますが、一家は奮起して、龍蔵の晩年のテーマとなる遼（10～12世紀頃、現在の中国東北部から内モンゴルにあたる地域を支配した王朝）の研究を続けていきました。



モンゴルを調査中の鳥居一家 1933年



きみ子の著書『土俗学上より観たる蒙古』
表紙に描かれている花は紫色のネジヤヤメ。



中国の白塔の前に立つ龍蔵ときみ子
1930年

1953年に龍蔵が亡くなった後、きみ子は遺稿の整理や出版に向け奔走しました。また、若き日の学友や教え子らと文通を再開し、余生を過ごしました。

最後に、きみ子が詠んだ歌をいくつかご紹介します。

モンゴル調査旅行に際して詠んだ歌

しばし今 名残おしまる 日の本の
景色よさらば 我はゆかまし

行けど行けど 山と水とは 浮び来ぬ
高原に見し 蜃気楼の影

オーシスの 水は涸れ行く 沙漠路に
礎のこる 高樓の跡

湖のほとり一面に咲くネジヤヤメを見て一首

行きつかれ 夢にも色は 香ひつつ
さめてもたどる 紫の野辺



モンゴル調査地に咲いていたネジヤヤメ（紫色の花が美しい多年草）のイラスト（作者は不詳）。